岡山理科大学紀要　第 37 号 B pp.19-29(2001)

前置詞 with の同伴性について

河本　誠

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(2001年11月1日　受理)

概要

with による同伴といった場合、個体間の同伴、個体と事象(非個体)の同伴、あるいは事象間の同伴といった違いがあることが分かった。個体間の同伴では日本語の助詞「と」による同伴表現に対応しており、日本人に違和感はない。事象と個体の同伴の場合、事象を表すのは通常、節であるが、この場合、日本語の「と」が対応しないので、我々に理解し難いと感じられる。また、put up with のように、事象の中に動作主(主体)や被動作主(客体)などを表す部分が欠けていて、それが with の同伴関係により、意味的に補われる形になっていることも分かった。この場合には、明らかに個体間の同伴関係は存在しない。従って、この場合、同伴を表す前置詞 with が、語順の変更を行う道具になっていると見ることができることを示している。What's the matter with you?も、後から対象が示される形で類似しているといえる。with 句は、副詞的であるが、前半の事象が成立する対象が with 句で指定されていることが特徴的である。また、play with(=be a part of)にも、個体間同伴関係はなく、事象と個体との同伴であり、結果として主語と with の後の名詞とに包含関係が成立している。結局、with は、空間的同伴関係が成立していなくても、2つのものを結び付ける、関係付ける、関連付ける機能を果たすことが見えてきた。2つのものの間の空間的関係がないような場合でも使えるが、それは with の元々のあいまい性から来ているもので、他の前置詞と異なっているといえる。

1章　分析ツール

ここでは、次章で with の分析に用いる道具となるいくつかの基本的概念を準備する。

(1－1) with の同伴性

まず最初に、前置詞 with に似た前置詞 by について、by の近傍性から、受動態で行為者を示す用法が生じた根拠について、次のことに筆者も同意するものである。

> 動詞の他動性あるいは動作性が＜BE＋過去分詞＞形によって弱められるということは、行為者の積極的な役割も同時に弱められるということを含意する。そして、あえて行為者を表示する方法として by がどうして使用されるのかと言えば、おそらく、by が＜近傍＞あるいは＜側にて＞を表し、the computer was broken と John を空間的に近傍化することによって、＜『コンピュータが壊れた』ということがジョンの手の届く範囲である＞ということを by が含意し得るからである、と推測することができよう。つまり、＜コンピュータが壊れた状態にある＞と＜ジョンがその近傍にいる＞という空間関係から＜ジョンがコンピュータを壊した＞という推論が可能となる。しかし、John が by によって表示されているということは John の動作主としての積極的な働きは後景化されているとを同時に意味する。(p.88:田中)(波線は河本による)

行為者が主語や目的語といったものではなく、「by+行為者」の前置詞句であるということから、前置詞を介してものとものとが係わるわけで、他の多くの場合と同様、言わば間接性が出てくるということが注目に値する。

それでは、道具を示す with について、それが with の元の意味である同伴性(近接性に通じる)とどのように関連しているかについて、次の説明を筆者も受け入れるものである。

> ではその説明原理は何であろうか。まず、p by x は＜p とxの隣接性＞を表すことから＜手の届く範

囲＞が連想され、それを媒介にして＜手段（x によって）＞の意味合いが発生したと考えることができよう。＜手段＞と密接に関連したものに＜道具＞があるが、それは、通常、with で表現される。＜道具＞には、＜何かを手にとって、それで何かに操作を加える＞という典型的な意味合いがあり、対象はまずもって「モノ」である。それに対して、＜手段＞には、＜手に取って、それで操作を加える＞というよりもむしろ、＜依拠・寄り添い＞のニュアンスが強い。work by the rules（規則に従って働く）は＜依拠＞の端的な例である。by train や by fax 等は＜手段＞の典型的な現れである。また＜関連＞の by profession もたとえば by train との類推的表現とみなすことができるかもしれない。（p.87:田中）（波線は河本による）

このことから、with の道具を表す用法が with の同伴性から来ていることは異議ないであろう。歴史的に見れば、Shakespeare の時代には、次のように、受動態での行為者が of（から）で示されることもあり、by、with、of による互いに似た機能がそれぞれの前置詞の基本の意味で理解できることが重要である。

being there alone, Left and abandon'd *of* his velvet friends

ビロード服の友達に見離されてひとりいるので） *AYL*. II.i.50.（大塚：p.161）

近接性の意味を持っている前置詞がすべてその近接性から手段、道具などを示す用法を発達させたかということに関して、by と with は特殊性を持っていることが次のように述べられている。

near は far と対になる前置詞で＜距離＞を話題にする。beside の場合には-side から推測されるように<側面＞を話題にする前置詞である。また、around は＜周囲＞を問題にし、next to は＜配列＞が前提になる前置詞である。つまり、by だけがここでリストしたような前提条件を欠いたままで、p と x の＜近接性・隣接性＞を表現しうる前置詞なのである。

about も＜漠然とした隣接性＞を表すが、＜辺り＞としての意味合いが強いため、それは＜手段＞にはなりにくいという事情がある。なお、上でも指摘したように、そばにあるモノを手にしてしまえば with となり、＜道具性（x を使って）＞が強調されることになる。with には＜主体が自分の手で操作可能＞という意味合いが強くあり、by の＜拠って＞の意味合いにおける＜手段性＞を表現するには適切ではない。（pp.88-89:田中）（波線は河本による）

動詞に対する文法項は、それ独自の共通の明確な文法的意味を持っている。このことに関しては、既に Greenberg から始まる研究がある。この文法項と排他的に前置詞句を使うことができる。前置詞句は、意味的にはその中の前置詞により意味的結合が表されるが、次のように動作の完遂性などの点で、文法項に劣ることが共通した特徴といえよう。このことが後で取り上げる"part with"等の理解に利用される。

He shot him.

He shot at him.

以上、2 つの前置詞 by と with は、似てはいるが違いもあり、次のようにまとめられる。

① by、with はそれぞれ近傍性、同伴性の意味的関連付けを行う

② with の道具性、by の手段性には一応棲み分けができている

しかしながら、やはり by と with は意味的に似ていることから、次のように、ほとんど同じように使うことが可能な場合がある、

How's by you?＝How's (it) with you?《口》元気(してた)?, どう?, やってる?

by the strong hand＝with a [the] strong hand 力ずくで, 無理に(以上はリーダーズ)

これらは、withの道具をあらわす用法ではなく、元々の同伴という意味でのみ理解できる。この捉え方が、次章でのwithを含む句の分析に使われることになる。

（1－2）with の同伴性：個体 vs.個体、事象 vs.個体、事象 vs.事象の同伴性

前置詞 with の考察に入る前に、空間関係を表す前置詞 in について見てみることにする。in について得られたことを with に適用し、with の分析に利用しようとするものである。

これまで英語の前置詞 in については、それほど日本人に違和感が持たれることはないと思う。それは、in が日本語の「に」に概ね対応しているためと考えられる。しかし、in で意味的に結合されているものが何であるか考えてみると、in の中でも互いに違いがあることが分かる、

They lost their way in the fog. 彼らは霧の中で道に迷った。

She had a newspaper in her hand.手に新聞を持っていた。

In Hokkaido it is very cold in the winter. 北海道では冬はとても寒い

Men differ from brutes *in that* they can think and speak. 人間は考え、話せるという点でけだものとは違う(以上は RandomHouse より)

A in B の形では、基本的に「A が B の中にある」ということを意味する。この場合 A の中で、in に結合するものが具体的に何であるか、ということを確認してみよう。in the fog、In Hokkaido、in that...の例では、in 句は A 全体に関係していると思われる。しかしながら、in her hand の場合には、次の関係が強く意識される:

A newspaper --- in her hand

もちろん

(She) had a newspaper --- in her hand

という関係も認められるけれども。このことから、in で結合されるものについて、意味的に個体と事象の点から分類すると、

個体 in 個体
事象 in 個体
個体 in 事象
事象 in 事象

の4通りが存在することになる。ここで注意すべきことは、個体が個体だけを直接修飾している、などと言っているのではない、ということである。上の例ではすべて in 句は文法的には副詞句で、前の節又は動詞句を修飾していることになる。その上で、in の関係を確認しようとすると、内容的には事象の中の一部である個体が浮かび上がり、個体 vs.個体や事象 vs.個体、事象 vs.事象において、in の関係が成立しているということである。

実は、そこのところを日本語では言葉の上で区別している。英語では in だけを使い、個体と事象を目に見える形で区別しないが、日本語でははっきりと違う形で言語化するのである。

日本語の格助詞「に」と「で」には共通して＜位置＞を合図する用法がある。しかしそこには棲み分けの原理が働いている。「に」は＜個体＞の位置を合図するのに対し、「で」は＜状況＞の位置を合図する。文法的に見ると、典型的に「に」は基本述語動詞に内在的な項(argument)を表示する。それに対し、「で」のほうは随意的な付加語(adjunct)を表示する。(p.29:中右)(波線は河本による)

日本語では個体と事象とのつながりに応じて、格助詞「に」と「で」を使い分けており、これらの助詞は、動詞との結びつきに関し、動詞の内在的な項、付加語などのレベルの違いを反映していると捉えることができるということである。日本語の動詞が英語の動詞に大体うまく対応していることを考え合わせれば、英語の前置詞句も、動詞に対して異なった役割を担うことを示していることになる。in 句の場合、それが動詞、節、あるいはそれらの中の一部である名詞のいずれに意味的に関係するか、ということになろうが、形式上、表面上ではっきりしているとは言えない。当然ながら、in という前置詞の持っている基本の意味で結びついている。

in で確認できたことを、with に当てはめてみよう。

I went to the zoo with her. 私は彼女と動物園に行った。

Britain has a treaty with America. 英国は米国と条約を結んでいる。

With all her faults, I still like her. たくさん欠点はあるが、それでも彼女が好きだ。

(以上は RandomHouse から)(下線は河本による)

I went to the zoo with her では、通常 with her が(I) went to the zoo を修飾していると言われる。この with の「～と(一緒に)」という部分が具体的に何かを突き止めようとすれば、結局 I と her との同伴ということになる。zoo と her との同伴ということは考えられない。従って、この場合、with の同伴関係で結ばれているのは、意味的に、個体(I)と個体(her)であると理解される。しかしながら、with は、前置詞として I went to the zoo と her とを結び付けていると考えられる。これは、いわば文法的、構造的な側面である。in の場合と同様、with では個体間の同伴、事象 vs.個体の同伴に応じて、即ち、with で結合される対象のレベルの違いで別の日本語が対応する、という特徴がこれらの例から浮かび上がってくる。

以上から、in では、日本語の助詞が素直に対応することから、我々が違和感を持つことは少ないが、with では、そのようなうまい対応がないせいか、一見すると、同伴ということでは理解するのが難しい表現が

目立つ。この認識が、「分離動詞＋with」の項目に直接に関連するなど、後で大きく役立つことになる。

(3)日本語の「と」と英語のφ/with /against

ここでは、動詞に係わる異なった文法的形態が、どのような一貫した共通の意味を持っているかを見てみよう。Shoot⇔shoot at の違いなどはよく取り上げられているが、with に関しては、筆者の知る限り、ほとんど目にしたことがない。日本語の「ト」に対応する英語表現という視点から、次の先行研究が参考になる。

日本語ではトで表示される対戦行為の＜相手＞は、英語ではゼロ表示の場合と、with や against などの前置詞で表示される場合がある。

(21) a. The Giants played φ / against the Dodgers. (ドジャーズと対戦した)

b. Japan fought φ / against the US in World War Ⅱ. (米国と戦った)

対戦相手をゼロで表示すると＜仕手＞の働きかけという結果に視点があり、トに相当するagainstを用いると＜相手＞との互角の対戦という過程的な側面が強調されることになる。次例の(a)の consult の場合でも、with がないと「専門家の意見を聞く」という＜仕手＞の働きかけの行為が焦点となるが、with を用いると、「話し合う」「相談する」という＜仕手＞と互角の共同行為の<相方＞が明示される。

(22) a. The young doctor consulted φ /with the specialist before treating his patient. (専門家と相談する)

b. consult φ a dictionary / map (辞書・地図を参考にする)

c. consult φ the weather (天気予報を参考にする) (p.20:吉川) (波線は河本による)

動詞に対し、それを補う項の(文法的)形態が、前置詞のあるなしで、また、異なる前置詞が可能な場合、前置詞どうしで異なるということを示している。動詞に対し、目的語や前置詞句が後に続く場合、一般論としてどのような違いがあるかを上の引用は説明するものである。

上の引用においては、φ、against、with の間の違いであるが、この議論は、他の動詞、前置詞でも同様に成立するものである。with などの前置詞がなく目的語が動詞に続く場合、＜働きかけの作用＞に焦点が当てられ、with や他の前置詞が続く場合にはそれがない、ないしは弱いということが極めて重要である。すなわち、動詞に前置詞句が続く場合、間接的、比ゆ的意味合いを生み出す可能性を秘めていることがわかる。

2章 with を含む文の意味分析

ここでは、with の箇所が理解し難い文を取り上げ、それらが前章で導入した知見を使ってどのように説明できるかを見ることにする。

(2－1)分離動詞＋with

動詞 part については、ほとんど同じ意味で part from～と part with～とがあるが、from と with がほぼ反対の意味であることから、奇妙に感じられる。先行研究を次に挙げる。

(42) John broke with Mary.

(43) John doesn't want to part with his car.

(42)(ジョンはメアリーと手をきった)、(43)(ジョンは車を手離したくない)における with を from(分離の出発点)で言い換える(例えば *Longman Dictionary of Contemporary English* s.v. with 10)のは通例であるが、これはあくまでも辞書的な便宜にすぎない。「分離動詞＋*with*」は「・・・との同伴関係をこわす」の意ととるべきで、その証拠に with がその原義の「同伴」と正反対の「非同伴」や「分離」の意をもったことは英語の歴史にはないという事実をあげることができる。そして、例えば(42)は次の(43)

(43) John broke relations *with* Mary.

の省略形と考えるほうがまだしも論理にかなっているだろう。(p.76:上野)(波線は河本による)

波線部分の with が同伴を表すものとして、「・・・との同伴関係を壊す」と考えているところが筆者には気になる。それでは relations with Mary を1つの名詞の塊と考え、broke の目的語と捉えるということになる。全体の意味としては良しとしても、構造の見方としてはこれも便宜的といわざるを得ない。そうではなく、前章で見た動詞の表す行為において、with 句は単に相方を示しているに過ぎない、と筆者は考えたい。従って、

むしろ、John broke relations / with Mary「・・・と同伴関係を断つ」と with 句の部分を副詞的に取るべきと考える。ここでは、John と Mary、John と his car との間には 個体間の同伴関係が元にあり、その物理的な同伴関係がなくなると考えることもできる。また、事象 vs.個体の同伴関係とも考えられる。この節での結論は後者になる。「分離する」という行為での同伴関係である点が特異であり、この点は後でさらに述べる。

前置詞を介さない次の形と比較してみよう。

break a vase

part one's hair

これらでは、それぞれ a vase、one's hair への働きかけが出て、break from Mary、part from his car では from の空間的意味から、その空間関係に焦点が当てられることになる。with の持っている対等的ニュアンスはこれらでは出なくなってしまうと同時に、他動詞としての意味(壊す、分ける)が強くなる。従って、with が入る場合、from の空間的意味や相方への働きかけに焦点を当てるのではなく、対等のニュアンスでの取り上げになり、part with の例ではやや比喩的、擬人的要素が入ってくるのではないかと推測される。次の例でもそのように感じられる。

A good advertisement will make a person decide to part with his money. (リーダーズ)

前章の例として取り上げた日本語の「ト」が with に対応していて、英語と同じ構成・役割を果たしている点も注目される。

逆に、日本語の「ト」に英語の何が対応するかを分類したのが次である。

英語の対格がト格に対応する動詞には次のようなものがある。

＜相手＞ト　対戦　: fight (with / against), play (with / against), consult (with)

＜相方＞ト　相互的動作: marry, wed, divorce, <u>part, break</u>

相互的関係: resemble, contradict, parallel, equal(p.21:吉川)

(波線の部分は河本による追加)

分離動詞はまさに相互的動作の項目に当てはまっていると思われる。主語の一方的な働きかけというより、共同行為という側面を持っている。marry, wed に対し、divorce, part, break は反対の概念であるにも係わらず、同じ前置詞 with による句でそれらの行為の相方が示されることは、動作に絡む人やものの関係に焦点が当てられているといえる。

この節では、「分離動詞+with」の with には、日本語の「ト」が大体うまく対応するが、英語の with の箇所を個体間の同伴では理解できず抵抗を感じることを述べてきた。それは、動作としては分離であるが、その動作の相方が同伴で示されるのに対し、meet のような結合の場合は、with のあるなしのどちらでもほとんど違和感を持たれないはずである。それは行為の結果、with の同伴関係が存続することに大いに関係があると筆者は考える。池上の言う結果指向性が少なくとも英語には強いことの一面と言えるかも知れない。従って、この節の引用のように、with を from で言い換えるのは、便宜上のことであり、捉え方、視点が異なっているのである。break、part という行為は、一人で行えるものではなく、その行為の相方が with 句で示されている。それらを

John fought with Mary. (John は Mary と対戦した)

The bill *met with* approval. (その法案は承認された)

と比べてみると、fought の場合には、with は John と Mary の物理的、継続的な個体間の同伴でうまく理解でき、met の場合には、(行為の結果)同伴が生まれるのに対し、break、part の場合には、2つの個体間の同伴は行為の始めにだけ成立していた(起点の)事項である点が異なっている。従って、個体間の同伴とは考えないほうがよいということになる。

ここまで考えてきて、池上の次の記述があることが分かった(再認識した)。

(84)a (？)太郎ハ花子カラ別レタ

(84)b　太郎ハ花子ト別レタ

(85)a Mary didn't want to part *from* her jewels.

(85)b Mary didn't want to part *with* her jewels.

(日本語では「人カラ別レル」よりは「人ト別レル」のほうが自然である。(85)の英語の表現は＜物を手放す＞の意味で、英語では＜人と別れる＞の意味のときは part *from* a person が普通の言い方であ

る。)(84)や(85)で見られるのは、<起点>(FROM)と<近接性>(WITH)の表現の交替である。<存在点>(AT)というのは<近接性>(WITH)の一つの特別な場合と考えることができるから、(84)や(85)のような例も<起点>と<存在点>の交替ないし中和という問題と関連するものと考えることができる。<別れる>や<手放す>という意味自体はもともと<起点>的な要因を含むものであるから、問題になるのはこのような動詞が「ト」や with のような<近接性>の表現と共起する場合である。

このような場合における<近接性>の表現の交替には、いくつかの要因が関係しているように感じられる。一つは、「ト一緒デアル」、meet〔encounter〕*with* のようなそれらと対をなす意味的にプラスの表現で用いられる<近接性>の表示が転用されたという感じである。(これは意味的にプラスの TO がマイナスの FROM にとって代わるという場合と比較できる。)また、日本語の場合なら「人ト戦ウ〔争ウ〕」、英語の場合なら fight〔encounter〕*with* のようなほぼ対等の相手どうしという感じの「ト」や with の用法ともつながりがありそうである。そして、最後に英語の場合には Away with him!<彼を追い出せ>、Down with him!<彼を打倒せよ>などに見られる行為の対象を示す with の用法に近いものも感じられる。(pp.169-70)

筆者が到達した結論にほぼ一致するものである。また、池上は次の考察も行っている。

同じことは他の多くの場所的表現、およびその転用に見られる。run behind the wall という表現は<壁の後を走る>という意味と並んで<壁の後へ走り込む>という<到達点>的な意味にも取れるが、<壁の後から走り出る>という<起点>的な意味でとるためには run from behind the wall というように<起点>」の表現を明示することが必要である。<笑わせつづける>の意味の keep him laughing は深層的な keep him AT／To laughing という形での AT／TO がゼロとして実現されている場合と考えることができるが、<笑わせないようにしておく>の keep him from laughing では<起点>の表示の from をゼロにすることはできない。さらにすでに検討したことであるが、英語の become a doctor や make him a doctor のような表現で<到達点>の表示(become TO a doctor, make him TO a doctor)がゼロとなっているのも、やはり同じ傾向の現れである。(pp.127-8)

起点を示すものとして with が使われているとすれば、from with とでもしなければならないということになる。そうなっていないことから、分離動詞に続く with は起点での状態を示しているとは考え難いことが解る。

(2－2)項を補う with 句

(A)put up with, catch up with, get down with の構造

これら3つの成句における動詞 put, catch, get はいずれも本質的に他動詞である。すると、動詞そのものに着目した場合、それぞれに主語は存在しているが、目的語が欠けていることになる。catch up with の場合には、up が catch の動作の完成、終結を意味し、with の後の名詞が意味的に catch の被動作主であることに間違いないであろう。ここで、with が同伴であり、(主語+)catch up と同伴関係であるということで、〔主語〕と〔with の後の名詞〕との間の個体間同伴関係も成立している。この場合、まとめると、同伴の結果、その同伴で動詞の不足した項が補われる形になっていると考えられる。

He could not *catch up* (with) the leader in the race. 競走で先頭に追いつけなかった.

(RandomHouse より)

リーダーズの辞書にもcatch up with sb = catch up sbと記載してあり、これが直前で述べた解釈をサポートするものとは断定できないが、議論としては整合している。辞書を見ると、〔追いつく〕という意味ではtoやonがcatchに続く場合もあるが、それらはそれぞれの前置詞の基本の意味で理解できるので今の議論に対する反論にはならない。

put up with の場合にも、catch up with と同じように考えることができるだろうか。catch up with の場合、with が同伴を指示する語であり、catch up の目的語が欠けていて、with の同伴関係で put up の被動作主が補われるということである。言い換えれば、with 句が文法的には前の箇所を副詞的に修飾するが、意味的には動詞の目的語を補う役割を果たしていると考えられ、それがこの場合にも当てはまれば一貫した理解が可能ということになる。しかし、put sth/sb up の意味が問題で、この with のない形で sth/sb に対して「我慢する」という意味が元々存在するのかという疑問が生じる。これについて調べてみると、put up(vt)の用法として次のものがある。

（古）. . . を我慢する

がある。この up については、

無活動・廃用・貯蔵・取り片付けなどの状態

ではないかと推測するが、いずれにせよ、以上をまとめると、put up with の全体の意味が with の同伴の意味で合成できたことになる。

この節の議論には、その場しのぎの便宜的な論法が使用されてはおらず、前章で見た一般原理から全体の意味が合成されることが重要である。

(B) Away with him! Off with you! Down with the dust!の構造

このタイプの表現に対してはどうであろうか。with が同伴を表しているとして、その同伴関係の前の部分が away であり、意味的には、この部分に『何が』に当たる主語（動作主）が不足していることは一目瞭然である。これらは、二人称、三人称に対する命令になっていると理解されるが、それらを示す名詞・代名詞がそこに欠けているわけである。(A)での論理を踏襲すれば、同伴関係によって away, off, down の動作主体が指定されることになる。この場合、with の同伴というのは、with の後の名詞とその前の部分（節）との同伴ということで、明らかに、個体間の同伴関係は成立していない。前の部分に同伴関係が成立する個体がないからで、このことでこれらの文に対する理解が難しく感じられるのであろう。この点が、分離動詞+with の part with、break with とは似たパターンではあるが、それらと異なっている点であると考えられる。

辞書では、このケースの with の用法は独立した項目で扱っていて、「〔関連・関係〕・・・について、対して；・・・にあっては；・・・にとっては、・・・の見るところでは」が該当しそうであるが、個体間の同伴はなく、動詞の項を補っている点が注目されるべきである。

help にも、次のような似た例があることが分かる

Help me *on* [*off*] *with* my coat. オーバーを着せて[脱がせて]ください

Will you help me *up* [*in*] *with* this bag? この袋を持ち上げる[中に入れる]のを手伝ってくれますか

He planned to help me *with* my work. 彼は私の仕事を手伝ってくれるつもりだった

Let me help you *with* those packages. 荷物をお持ちしましょう（以上 RandomHouse より）

最初の２つの例では、意味的に考えて、それぞれ with my coat、with this bag は on[off]、up[in]の部分、即ち、help の目的格補語の部分と関係している。

Help me〔<u>on[off] with my coat</u>〕

Help me〔<u>up[in] with this bag</u>〕

下線の部分は実は Away with him!と同じ構造であり、my coat、this bag がそれぞれ on[off]、up[in]の動作主体（意味上の主語）になっている。後の２つの例では、help という動作の被動作対象を示していると見ることもできるし、単に副詞的と見ることもできるだろう。従って、この節をまとめると、with による同伴で補われるのは、述部の動作主であったり、被動作主であったり、補語に対するものであったりと様々であるということになる。

(C) この節のまとめ

(A)、(B)で取り上げた構造に対しては、当初の疑問が解決したわけであるが、この with を使った構造の生産性はどうであろうか。他にもこの形が利用されているのだろうか。辞書で成句を探してみると

give out with a scream（金切り声をあげる）

もあり、決してこのタイプが特殊な例ではないことがわかる。それでは、この with が入った形の表現と、with がない

give out a scream

との差が何かということになる。catch up with の場合は、

catch up sb ⇔ catch up with sb

捕まえる　　追いつく

の違いで、前者では sb が動詞の目的語になっているから「動作を受ける」という直接的、物理的な側面が表面に出され、with が入っている後者の場合には、動詞の表す動作の作用が間接的になり、比ゆ的意味合いが出る傾向があることをこの節の初めに述べた。give out の場合には、筆者にはその違いがはっきりと

解り難いものではある。ただ、with のあるなしで、個々の動詞の意味に応じて、意味の細かな分化、棲み分けの作用が働いていると考えられる。いずれにせよ、withを含んだ未知の表現に遭遇した場合、一貫したプロセスを経てその全体理解に達することがほぼ可能になったことは十分に評価できるといえる。

繰り返しになるが、直前の議論は、よくある次の説明と同じことである。

Shoot him ⇔ shoot at him

裸の目的語というのは、動詞が動作を表す場合、一般にその動作の完遂までも表し、shoot at him のように at などの前置詞が入ると、動詞の表す動作の中で、前置詞の部分が表面化、焦点化されており、例えば動作の完遂性は必ずしも出なくなる場合がある。そのことが with でも成立しているわけである。catch up with の例でいえば、with の同伴という側面に焦点が当てられるわけで、そこから、上で見たような全体的には catch の本来の意味から離れ、やや比ゆ的意味が生じると考えられる。

動詞の項が不足している場合、項を補う形で with が使われるのに似た次の例もある、

His back ran with blood. (p.108:吉川)

既に主語(動作主、主体)、目的語(被動作主、客体)などがwith句で後置されて指定される他の例を見たわけであるが、ran という動作の論理的な主語が文の主語とは別に後置された with blood で示されているわけで、これまで上で見たタイプとはまた異なっている。このように様々な項を補うことができるという with の特殊性というのは、結局、with の同伴性というあいまいさから来ているという結論にならざるを得ない。空間的意味がはっきりしていては不都合が生じるわけで、with の道具を示す用法もそのあいまい性の典型的なものと考えられる。

(2－3) 所属・勤務(･･･の一員で、･･･に雇われて、･･･に勤務して)

次もまた筆者が悩まされてきたものである。

He plays <u>with</u> a string quartet. 彼は弦楽四重奏団の団員だ。(以下2つは RandomHouse より)

How long have you been <u>with</u> the company? その会社に勤めてどれくらいになりますか。

I'm <u>with</u> the publishing division of the company. (Bookshelf)

He has been <u>with</u> the firm for fifteen years. (リーダーズ) (下線は河本による)

これらの文の理解が筆者にとって困難であった原因は、最初の例では、he と a string quartet とが同伴ということから、he は a string quartet とは別人と考えようとしたからである。即ち、

彼は弦楽四重奏団と(一緒に)演奏する。

with が入った多くの文では、個体間同伴関係を捉えることによって全体がうまく理解できるので、こういった場合だけを例外扱いにすればよいぐらいに考えてやってきた。しかしながら、a string quartet に対して個体間の同伴関係を保持させることに拘らなければ、これらの文の意味を取ることは何ら問題ないことがわかる。He plays と a string quartet とが事象 vs.個体で同伴であり、この場合には He と a string quartet とが個体同伴関係でなく包含関係を形成する、ということである。with が個体と個体との同伴に限らないことは前章の(1－2)で一般論として述べたことである。当然、文脈によっては、個体間同伴関係が成立するとして次のような理解も可能であろう、

彼は弦楽四重奏団と一緒に演奏する。

その会社とどれくらい協力関係にありますか。

日本語の「と」は、英語の with に多くの場合うまく対応しているが、この場合には無理で、このことについては1章で一般論として少し述べたことである。

(2－4) careful, generous, patient などに続く場合

ここでは、careful, happy の後に続く with, of, about, in などの間での違いは何か、ということを問題にする。まず、例文を挙げておく。(以下の例は新編英和活用大辞典より)

〔careful〕

◆She is *careful* **about** her appearance [health, dress]. 外見[健康、服装]に気をつかう

・He is *careful* **about** the rights [feelings] of others. 他人の権利[気持ち]を大切にする

・be *careful* **about** small things 小さなことに気をつかう

・Be *careful* **about** what you say. 言うことに気をつけなさい

・He is *careful* **about** how he dresses. 服装に注意深い
◆Be *careful* **in** money matters. 金銭問題には気をつけなさい.
・He is *careful* **in** his speech. 言葉づかいに気をつけている
・You must be very *careful* **in** recording your observations. 観察結果を記録するに際してはきわめて注意深くあらねばならない
◆be *careful* **in regard to** one's diet 食生活に注意する
◆Be *careful* **of** him; he is dangerous. 彼には用心したまえ，危険な男だから
・Be *careful* **of** these trees; they give some people an allergy. これらの樹木には気をつけなさい，アレルギーを起こす人もいるから
・It was not very *careful* **of** you to say that! そんなことを言うなんて軽率だったな
・Be *careful* **of** what you say. 言うことに気をつけなさい
◆Be *careful* **with** that; it's fragile! それは気をつけて，こわれやすいから
・Be a little more *careful* **with** your money; you don't have much. もう少しお金を大切にしなさい，たくさんもってるわけじゃないのだから.

〔happy〕

◆He is *happy* **about** his promotion. 昇進を喜んでいる
・I wasn't very *happy* **about** meeting her again. 彼女にまた会うのはあまりうれしくなかった
・I'm *happy* **about** my new job. 新しい仕事が気に入っている
◆She was *happy* **as** a child [a nurse, a teacher, etc.]. 子供[看護婦，教師(など)]のとき[として]幸せだった
◆be *happy* **at** the news [discovery] そのニュース[発見]に喜ぶ.
・I am *happy* **at** hearing that….
◆You will be *happier* **for** making this decision. この決断をすることでより幸せになりますよ
◆They were very *happy* **in** their work. 彼らは大変楽しく働いていた
・The young man was *happy* **in** having congenial work. その若者は運よく自分の性に合った仕事をもてた
・be *happy* **in** one's choice of expression うまく言葉が選択できる
・be *happy* **in** the knowledge that… …と知ってうれしい
・He was *happy* and comfortable back **in** his old home. 生まれ故郷に帰って楽しく快適であった
◆He is *happy* **over** his success. その成功を喜んでいる
・She was *happy* **over** her experience in Paris. 彼女にとってパリでの経験は楽しかった
◆I was not very *happy* **with** his proposal. 彼の提案を聞いてあまりうれしくなかった
・He is *happy* **with** his wife [friends]. 細君[友人]とうまくいっている.

前置詞は次のような基本の意味を持っている。

of は(方向の)対象物
at は対象の存在位置(ピンポイント化)
in は対象の存在範囲
with は同伴関係
about は漠然とした対象の存在範囲
by は近傍
over は全体に渡って
for は目的

これらの前置詞が、上記の形容詞に続く場合、with と他の前置詞とでどのような違いがあるか、ということがポイントである。

モノとモノとの関係というのは、どのようなものがあるのか。空間的な関係はそれぞれの前置詞が持っている基本の意味で示されていることが分かる。そうであれば、with はどのような意味を発揮しているのか。with は空間的にはこれらの中で最もあいまいな同伴という意味を基本的意味としている。それには、方向性、具体的場所指定といった意味は存在しない。by、about とも似ているが、単なる空間的関係といえない面を

持ち合わせている。

さらに、with に関しては動きが関係せず、近接ともいえるが、やはり広い意味での同伴であり、それだからwith が against で置き換えられる場合があることも納得がいく。従って、他の前置詞でうまく処理できなければ with が持ち出される、というのが当たっているかも知れない。

以上の違いもさることながら、of 以外の場合、主語と with の後の部分との間で個体間の同伴関係が成立する場合が多い。従って、その際、狭い意味で careful, happy を修飾しているというのではなく、前置詞句の部分が主語の状態に関する設定、条件になっていると見ることができる。上野はこのことを、with の特徴と捉え、with に関して、分離可能な関係である場合に使われると述べていて(pp.68-9)、例えば about では当てはまらないと考えているようだが、about(広くは of 以外の場合)で成立していると筆者は考える。

さらに、popularに続く前置詞句について見てみよう。

◆He is *popular* **among** the students. 学生の間で受けがよい

◆They were *popular* **as** entertainers twenty years ago. 彼らは 20 年前に芸人として人気があった

◆*popular* **at** Oxford オックスフォード大学で人気の

◆He is *popular* **for** his kindness. 親切なので人望がある

・The beach is *popular* **for** watching the sunset. その浜辺は入り日をながめるのによいことで人気がある

◆He is not very *popular* **in** Washington social circles. ワシントンの社交界であまり人気がない

・be *popular* **in** the office 職場で人望がある

◆At the University of Connecticut she was *popular* **on** campus. コネティカット大学ではキャンパスで人気があった

◆The company's products remain *popular* **throughout** the world. わが社の製品は世界中で人気をとどめている

◆He is very *popular* **with** the ladies. 女性に大変受けがよい

・He is becoming more *popular* **with** the public than ever before. 以前にもまして一般大衆の人気を得るようになってきた

・The lake is *popular* **with** anglers. その湖は釣り人に人気がある.

popular(人気のある)をよく考えてみると、確かにそれ自体に動きの要素はない。従って、popular に続くものとしては、人や人の居る場所が来るのももっともである。among には意外感はなく、in, at, on は有効範囲を示していて問題ないが、of は無理であることは明らかである。この場合にも、with が現れるのはやや意外である。among と with とは似ていると思われるが、among の場合は、その原義から、対象の範囲を絞る意味合いが出ることが違いとして見えてくる。with は無標の対象指定の機能を果たしているともいえる。このように考えると、動詞、形容詞に続く前置詞句は、前置詞の基本の意味と、動詞、形容詞の意味とが分かれば、どの前置詞が適当かをかなりの程度予測可能であるという結論に至る。

参考文献

池上 嘉彦:「『する』と『なる』の言語学」. 大修館書店. 1981
上野 義和:「英語の仕組み－意味論的研究－」. 英潮社. 1995
大塚 高信:「シェイクスピアの文法」. 研究社 1976
田中 茂範、松本 曜:「空間と移動の表現」. 研究社. 1998
中右 実、西村 義樹:「構文と事象構造」. 研究社 1998
吉川 千鶴子:「動詞の文法」くろしお出版. 1995

参考辞書類

「CD－ROM版 新編英和活用大辞典」 研究社
「CD－ROM版 ランダムハウス英語辞典」
「CD－ROM版 リーダーズ＋プラス V2」 研究社
「Bookshelf Ver2.0」 Microsoft/Shogakukan

Understanding of "With" from its Basic Meaning

Makoto KOMOTO

Department of Socio-Information, Faculty of Informatics,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700-0005, Japan

(Received November 1, 2001)

The main objective of this paper is to explain several difficult usages of "with" from its original meaning, i.e. accompaniment or coexistence in proximity.

We found there are three types of semantic coexistence of objects or ideas, using a preposition "with." They are Object vs. Object, Affair vs. Object and Affair vs. Affair. Normally, objects can be identified to coexist by the means of a preposition "with" in a sentence. In the case of "part with", however, the whole sentence should be understood as Affair vs. Object, instead of Object vs. Object, "with" functioning just to show the other participant of an event besides the participant represented by the subject. The same is true with "put up with," but the object within the "with" phrase should be the grammatical object of "put up," meaning that the object of the verb is specified later than in the normal position, allowing for a different connotational meaning. Another type of Affair vs. Object is a phrase like "play with." In this case, Object vs. Object does not exist but the semantic inclusion results, meaning that the object represented by the subject is included in the objects represented by the noun phrase after "with."

We have a particle "to" in Japanese, which is similar to "with," but "to" cannot be used in Affair vs. Object. That is why we Japanese have great difficulty in understanding those sentences that contain "with" in the Affair vs. Object type.